「呑卵」から「呑象」まで

―獲物を丸呑みにする蛇の話あれこれ―

岡田　充博

一

本誌前号で落語の「蛇含草（そば清）」をめぐって拙文を草した際、蛇に関する資料を拾い集めていて、結構面白い話に出会うことができた。ただ、論の主旨から外れるため、割愛したものも少なくない。割愛と言っても私個人が勝手にそう思い込んでいるだけで、傍からは「何でわざわざ紹介の必要が？」と笑われようが、まさしく蛇足を承知の上で贅言を書き連ねておく。小稿では、獲物を丸呑みにする話に的を絞って取り上げてみたい。

二

蛇は獲物を丸ごと呑み込んで、腹中に収めて消化してゆく。口にする獲物の大きさと消化力の強さは昔から人を驚かせ、虚実織り交ぜて話題に事欠かない。

先ずは、ありそうな話ということで、卵を呑む蛇から始めよう。蛇が鶏の卵を呑むのは事実で、田舎育ちの私も子供の頃、ピンポン球のように腹を脹らませた蛇を、鶏小屋で目にした記憶がある。『春渚紀聞』や『子不語』などでは、木の卵を呑まされた蛇が、とろかし草の力を借りてこれを消化したが、も

っと現実味を帯びた話が、日本近世の随筆に見える。

江戸後期の本草学者、佐藤成裕（一七六二～一八四八）の『中陵漫録』巻五に「蛇含燕卵」があり、卵を呑み込んだ蛇の話三則を挙げている。内容は次の通り。

薩州の太田氏、鶏を養ふ。後の山より大なる蛇、時々来て鶏卵を呑て行きて、杉の木に纏ひ附て腹をしめる時は、其卵、自ら破ると見えたり。或時主人、卵の上に空をあけて此を吸ひ出して、煙管（きせる）の膠（やに）をつめて巣の中に置けば、又来て是を呑み去る。主人附て行き見れば、杉の木に絡て破らんとすれば、忽に解け落て綿の如く柔になりて死したり。

又豊後府内生石と言処にて、毎年燕来て巣を作る。蛇来て其卵を呑む。主人、其巣を両方に土を附て針四五本を指置く。或夜、蛇来て腹を傷る。其血を尋行て見れば山の中に入て死すと云。

又来て鶏卵を呑むあり。主人、細工して木にて卵を作りて巣の中に置く。時あって来て呑む。例の如く木に絡（ヒラキ）てしぼれども破れず。其木たる事をしって、又杓骨の木の枝に移り行て、尾の方より枝の間を過しこひて、口より吐き出したりと云。此智、人の考に附ざる事なり。此類の蛇談甚だ多し。後に詳にす。〔1〕

第一話によれば、腹に入った卵を潰すため、蛇は木に絡みつくのであるが、実際にそうするものかどうか、私には分からない。またこの蛇を退治するために、主人はタバコのヤニを使っている。これは実際に効き目があるようで、蛇にはタバコのヤニという話が、橘春暉『北窓瑣談』（後編巻一）や、昔話「たのきゅう」などにも見える〔2〕。

第二話は、第一話に続いて卵を狙う蛇の哀れな末路であるが、これについては特にコメントはない。面白いのは、続く第三話である。樹枝の股の部分を利用し、体を逆に扱いて木の卵を吐き出すという蛇の行為は、とろかし草よりもずっと現実的である。しかし、これも事実そういうことが有るのかどうか、私には分からない。いずれにしても、蛇を賢い動物として見ることは、日本も例外ではなかったようである。

目を西洋に転じてみると、プリニウスの『博物誌』にも、卵を呑む蛇の記事がある。

…　ヘビはまことに巧みな芸当をもっている。彼らは、もし自分の喉がうけ入れる大きさに達し

ていれば、卵を丸呑みにし、からだをとぐろ巻きにすることによって、からだの中で卵を破る。そして咳をして殻の欠けらを吐き出す。もし彼らが若くてか弱い年齢であれば、ヘビは卵をそのとぐろの輪の中に押え込み、だんだんと、そして強く締めつけるので、卵の一部分が、ナイフで切ったように、押えられている残りの部分から切り取られる。そしてヘビはそれを吸い込む。同じようにして鳥を丸呑みにし、その後で吐気とともに羽や骨を吐き出す。（第一〇巻九二）〔3〕

ヨーロッパの蛇も、やはり知恵と巧みな技を持つようである。

卵の話を見たところで、次にもっと大きな獲物はどうであろうか。蛇が呑む獲物と言えば蛙であるが、残念ながら面白い話を自分では見つけられなかった。南方熊楠『十二支考』の「蛇に関する民俗と伝説」は、蛇に睨まれた蛙が自ら蛇の口中に身を投げるという伝承を取り上げ、自身の実見を交えて批判的考察を加えている（「六　蛇の魅力」の項、岩波文庫本二五四～六頁／平凡社『全集』一八三～四頁）。ただ、これについては直接同書を開いていただくことにし、次節では一気に大きな動物を呑む話へと飛ぶことにしたい。

三

落語「蛇含草」の拙稿に紹介した唐・闕名『聞奇録』（『太平広記』巻四五九・蛇四）の話では、蛇が鹿を丸呑みにし、消化のために木の葉の薬効を借りていた。確かに鹿の角となると、如何に蛇の胃液が強力でも、これを熟すのは難しいであろう。そこで次のような話も伝わっている。

『南中八郡志』に言う、「麋冷県（広西省）の深山中に大蛇がいて、長さは数丈で胴回りは三尺もある。樹の上にいて野鹿が通ると頭を下げてこれに絡みつく。鹿がそこで暫くして死ぬと、先ず水を含んでこれを濡らして柔らかくし、頭や角もあわせて一緒に呑み込んでしまう。呑み終わると動くことができず、数日してやっと消化し尽くす。蛇が自分から樹に纏いつくと、鹿の角や骨はみな皮を突き破ってとび出し、傷を養生すること一ヶ月で治癒する」。また『永初山川記』に言う、「髯蛇は鹿を呑むと角までで止める」と。（『太平御覽』巻九百六・獣部一八・鹿）〔4〕

鹿を呑む蛇の記事は他にも多い。例えば北魏・酈道元『水経注』巻三七・葉榆水には、『南中八郡志』とほぼ同じ記事が見える。ただ、こちらは名称が「髯蛇」で、「長十丈、圍七八尺」とさらに大きく、楊氏『南裔異物志』〔5〕なる書を引いて、鹿を呑んだあと蛇肉に脂がのって美味くなること等を記す。さらに「これを捕らえるには、婦人の衣を投げつけると、とぐろを巻いて起きないので、走り寄って掴まえることができる。（搏之以婦人衣投之、則蟠而不起、走便可得）」と、女性の衣服に絡みつく好色な性格が加わっている。唐・段成式『酉陽雑俎』前集巻一七・広動植之二の「蚺蛇」の一条に、「長さは十丈で、常に鹿を呑む。鹿が溶けきると、樹に巻きついて骨を出す。傷の養生をしているときは、脂身が大変美味い。あるいは、婦人の衣を投げつけると、とぐろを巻いて起きないという。…（長十丈、常呑鹿、鹿消盡、乃繞樹出骨。養瘡時、肪腴甚美。或以婦人衣投之、則蟠而不起。…）」とあるのは、これに基づいている〔6〕。また唐・段公路『北戸録』巻一の「蚺蛇牙」も、こうした話を、『南裔異物志』からの引用として紹介している。

この他、唐・劉恂『嶺表録異』巻中に載る蚺蛇の話は、鹿の呑み方に関する記述が詳細で、しかも『南中八郡志』や『酉陽雑俎』などとは異なっていて面白い。現行の三巻本よりも、『太平広記』巻四五六・蛇一所引の『嶺表録異』の文章が分かりやすいので、こちらによって紹介する。

蚺蛇は、大きいものが五、六丈、胴回り五、六尺もある。これに次ぐものでも、三、四丈は下らず、胴回りもそれに比例する。体に斑紋があり、文様は錦の絞り染めのようである。土地の人々は言う、「春夏に山林の中で鹿を待ち伏せることが多い。鹿が通りかかるとこれを銜え、尾から呑んでゆく。ただ頭の角が口の外で妨げになると、すぐに樹林のなかに深く入り、その頭を置いて、鹿の形がくずれるのを待つ。頭の角が地面に墜ちると、鹿の身体はやっと呑み込まれて腹に入る。こうした後、蛇はすっかり衰弱する。その鹿が溶けると、元気で艶もよくなり、鹿を食べる前よりも壮健になる」と。あるいは、「一年に一頭鹿を食う」とも言う。〔7〕

鹿を丸呑みにして体を傷つけるよりも、角を落としてから呑むのがずっと賢いように思われる。事実云々はさておいて話として見るならば、『嶺表録異』の方が練り上げられた形と言えよう。また明の方以

智『物理小識』巻一一・鳥獣類に「蚺蛇」の条があり、「黎母山（広東省）周辺には山馬と蚺蛇を産する。山馬は鹿に似ていて蚺蛇がこれを呑む。山馬の角は甚だ大きいが、蛇の毒が一たび吐きかけられると、角は自ずから抜け落ちる（環黎産山馬與蚺蛇。山馬似鹿而蚺蛇呑之。馬角甚大、而蛇毒一呵、角自解脱）」という（文淵閣本四庫全書による）。明の王兆雲『揮麈新譚』巻下の「蚺蛇」にも「毒氣一呵、角隨解脱」とあり、蛇にとっては一層都合の良い展開になっている（四庫存目叢書による）。

関連してもう一つ資料を追加しておくと、宋・洪邁『夷堅志』甲志巻二〇に「葵山大蛇」の話がある。ここに登場するのは羊を呑む蛇で、「（羊を捉えると）何重にも巻きつき、先ず皮膚を咬んで血を吸い、そのあと体内に毒を吹き入れた。羊がだんだん縮んで、骨がないかのように柔らかくなると、ようやくこれを呑み込んだ（蟠束數匝、先嚙膚吮血、已乃噴毒其中。羊漸縮小、軟若無骨、始呑之）」とある。これも丸呑みする話としては都合よく出来上がっている。

中国の大蛇（蚺蛇はニシキヘビのこと）は、このように鹿を常食あるいは年に一度の御馳走にしていて、これを食べることによって更に逞しくなるという。しかし、所変わって西の古代ローマでは、鹿と蛇とは全く異なった関係でとらえられている。これもプリニウス『博物誌』に、次のような記事がある。

…　シカがヘビの死命を制する敵であって、ヘビを見つけさえすればその穴から引き出して食べてしまうことは知らない者がない。しかし、シカは生きているときにヘビの敵であるばかりでなく、そのからだのいろいろな部分もそうだ。その角を焼くときの煙がヘビを遠避けることはすでに述べた通りだが、雄ジカの頭のいちばん上の骨を焼くとヘビが集まって来るという。この動物の皮をベッドにしてその上に寝るとヘビの恐れはない。そしてそのレンネットを酢に入れて飲むと咬まれることを防ぐ。実際それをいじっただけでもその日はヘビにやられることはない。…

（第二八巻四二）〔8〕

鹿が食べる蛇は小さなもので大蛇ではなかろう。大蛇であれば当然逆襲も可能な筈である。しかし、角や毛皮がこれほどの効力を持つとすれば、たとえ大蛇であっても鹿を呑む勇気は起こらないのではないだろうか。いずれの所説が正しいのか、あるいはニシキヘビにも種々あるのか、その辺りは詳らかに

しないが、正反対の内容で興味深い。

なお、時代を降って十三世紀、マルコ・ポーロの『東方見聞録』に、カラヤン地方（中国雲南省の大理を指す）の巨大な蛇についての記事が見える。鹿についての明確な言及はないが、次のように語られている。

この地方には巨大な蛇が棲息している。とてつもなく大きいので、これを目にした人はひどく恐れおののく。話を聞いただけでも、愕然とすることだろう。それくらいおぞましい。その大きさであるが、長さは一〇パほど、もちろん長いものも短いものもある。また太さは六ポームの大樽ほど。頭の近くに二本の脚を持ち、指はなく、鷹やライオンのような爪を一つ持つ。頭はすこぶる大きく、目はパンの塊より大きく、口は人間を丸呑みできるほど大きい。醜く、おぞましく、猛々しいので、人間でも獣でも恐れぬものはない。…（中略）…この蛇は昼のあいだは暑さのせいで地中に隠れ、夜になると餌を探しに外に出て、行き当たるそばからあらゆる獣を食べ、そして川や湖や泉に赴いて喉をうるおす。〔9〕

「あらゆる獣」とある以上、鹿も当然その中に含まれよう。何の特記事項もないことからすると、中国雲南のこの大蛇は、鹿に対する苦手意識を持っていないようである。それにしても二本脚で爪を持つというのは不可解で、龍のイメージが混淆したものかと思われる〔10〕。

四

さて、鹿よりももっと巨大な獲物となると、中国には古くから象を呑む蛇の話がある。例えば『山海経』巻一〇・海内南経に見える次の記事は、よく知られている。

巴蛇は象を食べ、三年たって其の骨を吐き出す。君子がこれを服用すれば、心臓や胃腸の病は無くなる。…〔11〕

同書巻一八・海内経に見える記事「また朱卷という国がある。黒蛇がいて、青い頭で象を食べる（又有朱卷國。有黒蛇、青首、食象）」も、この大蛇を指すのであろう。『楚辞』の「天問」にも、「一蛇 象を呑む、厥（そ）の大いさは何如（一蛇呑象、厥大何如）」の句が見える。

他に『説文解字』十四篇下では、小篆の「巴」字について「虫なり。或いは曰く、食象の蛇なりと。象形（蟲也。或曰、食象蛇。象形）」とある。つまり、象を呑んで腹の膨らんだ大蛇をかたどった象形文字という説明である。このように象を呑む蛇の存在は、中国では古代から信じられ広く知られるところであった。晋の左思も「巴蛇を屠り、象骼を出す（屠巴蛇、出象骼）」と、「呉都賦」にこの伝説を織り込んでいる。

時代を降って唐代では、先に触れた『聞奇録』の第一話に、象を丸呑みにする蛇が登場する。

番禺（広東省広州市）に旅した書生がいて、多くの郡を経て、ある山中にさしかかったところ、雲気が高く一丈余り煙のように立ち上っているのが見えた。土地の者は「この岡に住む子蛇が象を呑もうとしているのです」と言い、村里に触れまわった。太鼓を鳴らし叫び騒ぐと、ヘビは深い谷の中に逃げ込んでしまった。一晩経つと、村人はそれぞれ罐や甕を持って出かけて行った。すると一頭の象が立っているのが見えたが、肉や骨はみな水になってしまっていた。そこで針で突いて、その水を取った。村人が言うには、「この水を航海の時に舟の中に置いておくと、蛟龍（悪さをする龍、みずち）を退散させることができるのです」とのことであった。[12]

子供の蛇で象を呑むというのだから、成長したらどんな大きさになるか、空恐ろしい。この蛇は、象を呑み込んでしまったのではなく、呑もうと噛みついたところで村人に騒がれ、象を放して岩穴に逃げ込んだのであろう。一旦呑み込んだ象を吐き出すのは、如何に巨大な蛇であっても、『中陵漫録』の木の卵とは訳が違って大変である。襲われた象が皮だけ残して水になってしまったのも不思議だが、これは拙稿「落語『蛇含草』をめぐって」の注19を思い出していただきたい。『太平広記』巻四五七・蛇二の「杜暐」（出典は唐・牛肅『紀聞』）では、両頭の蛇に咬まれた蛇遣いが死んで、骨と肉がすっかり溶けて水嚢のようになる。つまり胃液の消化力ではなく、噛み傷から入った猛烈な蛇毒によって、内部から溶けてしまうのである。（先に鹿の項で挙げた『夷堅志』「葵山大蛇」の羊を呑む蛇も、同様な発想と言えよう。）理解納得するまでに一寸説明が必要であるが、面白い話ではある。

さらにもう一話、『太平広記』巻四四一・畜獣八の「蔣武」も挙げておかねばならない。出典は唐の裴鉶『伝奇』で、象の依頼を受けて大蛇を退治すると

いう内容となっている。

宝暦年間（八二五～六）に、蒋武という者がいた。循州（広東省）の河源の人であった。立派な体つきの偉丈夫で、豪胆で勇気があった。独り険しい山中に住み、狩猟に明け暮れていた。弩弓の術にすぐれ、いつも弓矢を手挟み、クマやヒグマ、トラやヒョウに遇えば、弦音と共に倒れないものはなかった。獲物を割いてその矢尻を見ると、一本ごとに全て心臓を貫いていた。

ある日不意に門を叩く者がいて、何やらとても慌てた様子だった。武が扉を隔ててそっと覗いてみると、一匹の猩猩が白い象に跨っているのが見えた。武は猩猩が人の言葉を話せることを知っていたので、「象と一緒に私の門を叩くのは、何の用かね」と尋ねた。すると猩猩は、「象に災難がありまして、私が言葉を話せることを知って、私を背負ってやって参ったのでございます」と言う。武が「一体どういう難儀があるのかね。そのわけを話してくれないか」と続けると、猩猩は言った、「此の山の南二百余里ばかりに、嵌空の大岩窟がございます。その中に巴蛇がいて、長さは数百尺、電光のように閃く目、剣の刃のような鋭い牙をもっております。通り過ぎる象は皆呑み込まれて、被害は数百頭になりますが、避ける手立てもございません。山に住まれる貴方が射術にすぐれておいでと伺いましたので、どうか毒矢でこの蛇を射ていただきたいと存じます。この悩み事を除くことができれば、象たちはそれぞれ御恩に報いようとするでしょう」と。その象は地面に跪き、涙は雨霰と降り注いだ。猩猩は、「もし御承知いただけるなら、どうかすぐに矢を小脇に象の上にお登り下さい」と言う。武はその言葉に感じ、毒を矢に浸して象に登った。

行ってみると果してその断崖の下に二つの目があり、その光は数百歩の先まで射通していた。猩猩は「これが蛇の目です」と言った。武は怒り、弦を張り矢をつがえ、一発でその目に的中させた。象が武を背負って逃げ走ると、にわかに穴の中から雷鳴のような音が響き、蛇が躍り出てのたうち回り、身を縮めたり跳ね上がったりして、数里の内の草木は焼け焦げたようになった。暮れ方になって蛇が死んだので、穴の辺りを窺うと、象の骨と牙とが山のように積み上がっていた。そこに十匹の象があらわれ、長い鼻でそれぞれ大きな象牙を一本ずつ捲いて、跪いて武に献上した。武がこ

れを受け取ると、猩猩もまた別れを告げて立ち去った。そこで先の象にこの象牙を積んで帰り、彼は大資産家となった〔13〕。

象を常食とし、何と数百頭も平らげた大蛇ということで、先の番禺の蛇にも勝る迫力がある。

さて、象を呑む蛇ということで思い起こされるのは、フランスの童話、サン・テグジュベリの『星の王子様』であろう。よく知られているように、物語は彼が六歳の時に描いた、象を呑んだ蛇の絵をめぐる回想から始まる。そんな絵の創作に彼を駆り立てたのは、『ほんとうにあった話』という本に載っていた、猛獣を呑もうとする大蛇の絵だったとされる〔14〕。とすると、ヨーロッパにも古くからそうした伝承があったのだろうか。そこでまたプリニウスの『博物誌』を開いてみると、残念ながら呑象の記載は見当たらない。しかし、蛇と象との闘争について次のような記事がある。

ゾウはアフリカのシドゥラ砂漠のむこう、ムーア人の国、エティオピアの地、そして前述のように穴居族のところで産する。しかしもっとも大きいものはインドで産するのだが、このインドにはまた大蛇〈ドラコ〉もいて、それがたえずゾウと反目闘争を続ける。このヘビがまたたいへん大きくて、容易にゾウにとぐろ巻きに巻きつく。そしてねじれた結び目をつくってゾウが動けないようにする。この闘争で両方の闘い手が一緒に死ぬ。そして征服されたゾウは倒れる際に、その重みで巻きついているヘビを押し潰す。（第八巻一一）〔15〕

これによれば、ゾウと大蛇は天敵のような関係で、出遭えば共倒れとなる壮絶な闘いが繰り広げられていたことになる。同書の記事はさらに続く。長くなるがこれも引いておこう。

動物はいずれの種を問わず自己の利益のためには驚くほど抜け目がない。いまわれわれが考察している動物がそうであるように。大蛇のもつひとつの厄介なことはそれが非常に高いところにのぼっていることである。したがってそれは牧草地へ行くゾウによって穿れた足跡を見張っていて、高い樹の上からゾウの上に落下する。ゾウはヘビに巻きつかれて闘うことがひどく不利であることを知っている。それでヘビを樹木あるいは

岩にこすりつけようとする。ヘビはそれを警戒している。そこで尻尾を枷にしてゾウの歩行を妨げはじめる。ゾウは鼻でその結びを解く。しかしヘビはその頭をゾウの鼻孔へすっぽりと突込んで呼吸を妨げ、同時にゾウのいちばん柔らかい部分を引き裂く。またゾウの通路で出会うと、ヘビは竿立ちになってゾウを襲い、とくにその眼を狙う。これがしばしば盲で、飢のため疲れ果て、惨めに衰弱したゾウが発見されるゆえんである。

自然が自分でそれを見て楽しむために、一対の闘争者間の仕合を仕組んだのだということよりほかに、こんな闘争に対するどんな原因をでも挙げうるものがいようか。

またこの闘いについていまひとつの説明がある。ゾウはひどく冷血の動物であり、したがって、たいへん暑い季節には特にヘビに狙われるのである、と。そうして、こういう理由で、ヘビは川の中へ潜り込んでゆき、ゾウが水を飲みに来るところを待伏せていて、起立ってその鼻に巻きつき、耳の中に噛み傷を与える。そこが鼻で守れない唯一の場所だから、と。それからヘビは非常に長いので、ゾウの血液全部体内に受け入れることができる。それで血を飲んでゾウをからからにしてしまう。すると血を抜かれたゾウはどうと崩れ落ち、ヘビは血に酔っているのでゾウに押し潰されていっしょに死ぬのである、というのだ。（第八巻一二）

知恵と死力を尽くした巨獣の闘争が詳細に語られ、なかなかの臨場感である。読む者をワクワクさせる魅力はあるが、どうも「講釈師、見てきたような…」の典型のようで、眉に唾をつけたくなる。

西洋の文献を覗いたついでに、中近東アラブ世界にも目を向けてみよう。

『インドの驚異譚』は、南イランのナーフザー（船主ならびに船舶経営者）、ブズルク・ブン・シャフリヤールによって蒐集・編纂された十世紀の船乗りたちの記録であるが、その第三二話「大蛇に教えられた象牙の山とオマーンの毒蛇」の前半部は、象を食べるヘビの話である。この引用も長くなるが、左に示しておこう。

アブー・ムハマンド・アル＝ハサン・ブン・アムルは、ナーフザー衆の一人を通じて〔伝え聞いた話として〕、つぎのことを私に語ってくれた。そのナーフザーは航海を続けていたが、舟への

〔逆〕風が激しくなり、時化が襲って来たので、〔南方の〕視界に見えてきた入江に避難しようと、そこの浦に入った。そこで一昼夜を過ごして、翌朝になった時のこと、彼らの眼の前の陸地をおどろおどろしい様相をした一匹の大蛇が通り過ぎたのである。その大きさたるや、他に譬えようがないほどもの凄い奴だった。やがて、その蛇は入江に下りると、まさに稲妻を思わせるばかりの速さで対岸に向かって渡り、別の側に上がった。そして、午後の祈りの時刻の後になった時、再びやって来て、ゆっくりと同じ入江を渡って行った。

こんな具合に五日間、毎日、朝になると現れては渡り、午後の祈りの時刻の後になると、再び戻って行くことが続いた。そこで六日目になった時、そのナーフザーは水夫たちに向かって「陸に下りて、この蛇がどこへ行くのか、よく見極めて来い」と命じた。そこで、六日目にその大蛇が陸に姿を消した後に、彼らは〔乗っていた船から〕陸に下りると、その土地を一〔アラビア・〕マイルほど奥に向かって進んだ。すると、豈図らんや、密林の灌木が鬱蒼と茂って水の澱んだところに、大小の象牙が溢れているではないか。そこで、彼らはその知らせを持ってルッバーンのもとに帰ると、翌朝、ルッパーンは部下を連れて下船し、それが本当だということを確認したのである。そして、彼らは船に戻り、蛇が姿を消した後、再び戻って来る時までの間中、象牙を運び〔船に〕移し続けたので、ついにはその量たるや膨大になるほど沢山のものを運び出すことができた。しかも、彼らが運んだものと同量に相当する〔品質の劣る〕望ましくないものや、金目にならないものについては、船から〔海に〕投げ捨てた。このようにして、凡そ二〇日間、そこに滞在した後、彼らはその入江から出航した。ところで、例の蛇についてであるが、蛇はそうした象たち〔の肉〕を喰って、奴ら（象たち）の牙〔だけ〕を残したという訳である。〔16〕

大量の象牙を手にして帰る結びは、先の「蔣武」の話と同様である。象といえば、やはり気になるのは高価な象牙、ここに関心が向くのは洋の東西を問わないようである。

アラブの話を覗いたところでまた東に戻り、日本も一瞥しておこう。象の生息しない我が国には、当然、象を呑む蛇の話は存在しない。しかし、熊を呑もうとした蛇の話があった。これも『中陵漫録』に

見えるもので、巻一一の「大蛇争熊」に次のように言う。

先年、羽州置賜郡開村に大蛇あり。或時、出て熊を取て含む。熊、其蛇の口を裂て去る。其蛇の骨あり。後人恐て、此骨を取るものなし。〔17〕

熊を呑んだところまではよかったものの、逆襲に遭い口を裂かれて敢え無い最後と、話は何とも呆気ない。その骨が残っているとなると、ひょっとして恐竜の化石の発見などから派生し変化した伝承かと、むしろ別の興味が湧く資料である。

もう一つ、日本の大蛇に関する奇妙な記事が、古く中国の史書に見える。『太平御覧』巻九三三・鱗介部五・蛇上に、『梁書』を引いて次のように言う〔18〕。

倭国に獣がいて、牛のようで山鼠という。また大蛇がいて、この獣を呑む。蛇の皮は堅くて斬ることができないが、その上に穴があって素早く開閉し、時に光を放つ。ここを射て命中すれば蛇は死ぬ。

一体どういう蛇なのか、首を捻る。南方熊楠も「蛇に関する民俗と伝説」で、「日本人たるわれわれ何とも見当の付かぬ珍談だが何か鯨の潮吹の孔などから思い付いた捏造説でなかろうか」とコメントしている（岩波文庫本二三一～二頁、「身の大きさ」の項）。

五

さて、地上最大の動物である象にまで話を広げてきたが、最後に、我々にとって一番怖い、人を呑む蛇の話について見ておくことにしたい。

中国では、拙稿「落語『蛇含草』をめぐって」の注19にも記したように、『太平広記』巻四五七・蛇二に「天寶樵人」（出典は唐・戴孚『広異記』）がある。

天宝年間に、山に入り酒に酔って眠ってしまった樵夫がいて、蛇に呑まれてしまった。その男は微かに目覚め、身体が動き揺れるのを訝しく思い、目をあけようとしたが出来ない。そこではじめて何かに呑まれたと気づき、木樵刀で腹を切り割いて出ることができたが、目が眩んで混乱苦悶し、随分時間が経ってやっと訳が分かったのであった。その人はそれから半身の皮が溶け落ち、白癜のような状態になってしまった。〔19〕

実話とは思われないが、生々しい現実感があって読後の印象は強い。そのためであろうか、この話は宋の銭易『南部新書』庚（巻七）にも節録されている。また類話は、さらに時代を降っても見つけることができる。例えば、清の慵訥居士『咫聞録』巻三の「蚺蛇」には、次のような一節がある。

…　また藤県（広西省）のある床屋が、村を通りかかって酒屋を目にし、そこで飲んで泥酔し、樹の根方に倒れて眠り込んでしまった。たまたま蚺蛇がやってきて、見つけてこれを腹に呑み込んでしまった。床屋は全身がくるまれ、だんだんきつく締め付けられるのに気づいたが、目は開けられない。そこで急いで腹巻きの袋からカミソリを取り出すと、前に向かって切り開き、腹を裂いて外に出た。蛇は死んでしまったが、人間の頭や顔や手足はというと、皮がもう溶け落ちていた。薬で治療して、治りはしたものの、皮膚は皺寄ってどこも火傷の痕のようで、今でも床屋家業をしている。〔20〕

明らかに「天寶樵人」の翻案である。『咫聞録』はさらに続いて、宣化県の洪水の際に流れ着いた蚺蛇が、水牛を角のあたりまで呑んでいたことを記し、腹を割いてみると牛の身体の半分が溶けていたと言う。いずれも蛇の消化液の強力さを、誇大化して伝えるところに主眼がある。

さらに同じく清の陳尚古『簪雲楼雑説』全一巻に、こちらは明代の話として「五里蛇」が載る。

吾湖の沈某公は、明の万暦年間に滇南（雲南省）を巡撫した。初めて到着すると、文武百官が謁見にやって来たが、参将（副将の下に位する武官）の安という者がいて容貌が甚だ醜怪であった。その首から上は僅かに白骨が残っているだけで、額から鼻筋、頬骨や顎がなく、ただ眼光だけが爛々と輝いて人を刺すように注いだ。公は大いに驚いて、彼一人を留めて訳を聞いた。すると自ら言うには、「この地の蚺蛇の千年以上の者は、高さが数丈で、数里あるいは七八里にもわたる長さになります。いつも夕方に這い出して豹や虎などの獣に遭うと、吸ってこれを呑み込み、人間の場合も同じです。私はあるとき夜帰ろうとして、風に巻かれて運ばれるのを感じました。走り進んで〔何かの中に〕入ると、身体は丹爐の中に坐り万の火が一斉に放

たれたようで、その上に不潔な生臭さが逼ってきました。私は蚺蛇の腹に入ったのではと疑い、すぐに刀を抜いて厚さ五六寸ばかりを切り開き、この蛇が天を揺るがし地を突いて数十里の外までのたうち回るのに任せました。時間が経ってやっと外に出ると、その蛇はもう死んでいましたが、私は体中が真っ赤になり、頬は皮も肉もすっかり無くなっていました。疲れ切って眠り、目覚めると痛み始め、半年してやっと治癒しました。この蛇は長さが約五里（三キロメートル近く）もあり、山中の人は競って脂を取って灯火を燃やしました。今もその骨が残っていますが、鱗の大きさは笠のようです。悔しいことに私は五体を備えながら無残な姿になり、それが平生の恨みとなっております」と。公は言った、「昔、狄武襄（宋・仁宗の時の名将狄青）が崑崙関を破った時も、状貌魁奇な銅面を被り、見る者は胆を潰したという。君も手柄を立てること、きっと遠くないであろう」と。後に蛮獠は安将軍と聞くと、驚き恐れて逃れ隠れ、果たして彼はしばしば勲功を立てて、副総管に抜擢されたのであった。〔21〕

これもまた「天寶樵人」がもとになっていると考えられるが、蛇に呑まれた武将の後日談が加わって、肉付けされた纏まりのある内容になっている。時間をかければこの類の話はまだまだ拾えるであろうが、手持ちの資料はざっとこんなところなので〔22〕、中国については以上で切り上げたい。

次に日本に移ろう。我が国では、古く記紀神話に見える八岐大蛇から始まって、人を呑む蛇の話は種々語り継がれてきた。が、ここでは趣向を変え、「蛇含草」「そば清」と絡めて落語の中から一席、「夏の医者」を挙げておく。

医者のいない村で病人が出たので、病人勘太郎の息子が、隣り村の玄伯という医者を呼びに行った。その帰り、玄伯と息子が山の頂上で一休みしていると、二人ともうわばみにのまれてしまった。ほおっておけば、うわばみの腹の中でとけてしまう。ところがそこは医者の玄伯、大黄の粉という下剤をあたりへばらまくと、うわばみが苦しみ出し、二人をくだしてしまう。

二人はほうほうのていで病人の家にたどりつき、診ると萵苣（ちしゃ）を食べすぎたための腹痛、「夏の萵苣は腹にさわるというが、薬を二、三服のめばなおるから……」と薬をとり出そうとしたら、薬

箱がない。うわばみの腹の中に忘れて来たことに気がつき、玄伯は山へ引き返すとうわばみがまだ苦しんでいる。玄伯が「腹の中へ忘れものをしたから、もう一ぺんのんでもらいたい」というと「もういやだ。夏の医者（蒿苣）は腹へさわるから」〔23〕

「天寶樵人」ほかの些か気味悪い話の後では、笑いによる一服の清涼剤となってくれる。

さて、「夏のチシャ」で気分転換したところで、今度は西に目を向け、また怖く生臭い話に戻ることにしよう。

『博物誌』には、途方もなく大きい蛇についての次のような記事がある。

メガステネスは、インドではヘビが非常に大きくなって、雄ジカや雄ウシを丸呑にすることができる、と書いている。そしてメトロドロスは、ポントスのリンダクス河のほとりでは、ヘビは、鳥がそのうえを高くそして速く飛んでいるのに、それを捉えて呑み込むと書いている。ポエニ戦争の最中、バグラダス河のほとりで、レグルス将軍によって、一つの町を強襲でもするかのように、大砲やカタパルトを用いて退治された、長さ一二〇ペス（三五・四メートル）もあるヘビの話はよく知られている。その皮と顎骨がヌマンティア戦争（前一四二―一三三）のときまでローマのある神殿に保存されていた。これらの話には、イタリアにいるボアと呼ばれるヘビによって信憑性が与えられる。このボアは非常な大きさに達するので、誉れめでたき故クラウディウスが元首であったとき、ヴァティカヌス丘で殺された奴の腹の中から一人の子供がそっくり発見された。彼らの本来の食べ物はウシから絞られた乳であり、それからその名（ボアリウス＝牛の）が来たのだ。（第八巻一四）〔24〕

ヴァティカヌス丘での事件については、事実でないことを祈りたいが、ラモナ・モリス、デズモンド・モリス共著の『人間とヘビ』は、第六章「誇大評価されたヘビ」で次のように述べている。

大蛇は機会さえあれば、人間を飲みこむという話はたくさんあるが、この種の報告のなかで動物学者に広く認められている例はわずかしかない。東インド諸島で、一四歳の少年が五メートル以上もあるニシキヘビに飲みこまれた事件があった。からだの中程が怪しくふくれたヘビが見つかり、

殺害されたのだった。この巨大なヘビは解剖され、行方不明だった少年のからだが人目にさらされた。〔25〕

同書はまた、町外れの道端で酔いつぶれた男性が左足をニシキヘビに呑み込まれ、翌朝気づいた時には足が消化され、病院で切断手術を受けて一命を取り留めた話を紹介し、「これがおこりそうな事実とフィクションをミックスした、典型的な大蛇の話である」と結んでいる（一五〇～一頁）。先の「天寶樵人」等の話とよく似ているが、この場合は影響関係というよりも、説話の発想が東西で偶合したケースと見るべきであろう。

六

以上、「呑卵」からはじめて、「呑象」さらには「呑人」へと話を進めてみた。纏められるような内容でもないので、『人間とヘビ』から「呑象」に関する一節を借り、結びに代えることにしたい。

同書は言う、「現実にはゾウ――成獣だろうが生まれたての幼獣だろうが――が最大級のヘビを満足させる餌になったことはない。それどころか、ライオンやトラを殺して飲みこむ獰猛なヘビがいるという、それほど異様でもない話も誇張である。現実に目撃されたニシキヘビとトラの数少ない戦いでは、きまってトラがヘビを殺し、一部を食べる結果になったという」（一五五頁）と。成程、事実はその通りであろう。ただ、そうではあっても、ここに紹介した数々の伝承は、依然として私たちの好奇の心をくすぐり続ける。サン・テグジュペリは成長の後も、六歳時作のその絵で大人達を試し続けたと語るが、私としては、そうした心性に繋がる大切なものが、これらの法螺話の中にもあってほしいと願うのみである。

注

1　日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』（吉川弘文館、一九九五年新装版）による。第三期題三冊、一二一～二頁

2　「落語「田能久」をめぐって　―「饅頭こわい」付記―」（『横浜国大　国語研究』第三〇号、二〇一二年）参照。『北窓瑣談』は、『日本随筆大成』第二期第一五冊所収。同話は二六五～八頁。また南方熊楠は、『十二支考』の「蛇に関する民俗と伝説」で、『和漢三才図会』を引いて、穴に入った蛇は煙草の脂（やに）で出せると記し、さらにアフリカ産のパッフ・アッダーという猛毒の蝮につい

て、この蛇が煙草汁を忌み、「この物煙草汁に中(あた)って死するは、人がこの物の毒に死するより速やか」であるという（平凡社『全集』第一巻二〇六頁、二二一頁／岩波文庫『十二支考』上冊二八六、三〇七頁）。『和漢三才図会』の記事は巻四五・龍蛇部・蛇皮に見え、巻九九・葷草類「煙草」にも、猫・犬・蛇・鳥が煙気を嫌うとある。島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳『和漢三才図会』（東洋文庫・平凡社、一九九一年）では、第七冊四〇頁および第一七冊三九二頁。（ただ、同書の注によれば、「煙草」の記事にはテキストによって異同があり、杏林堂版原文は「猫犬及諸鳥」で、「蛇」字はないとのことである。）また、蛇除けということで附言しておくと、中国では羖羊の角が効くとされている。（羖羊は、手元の辞書によれば「黒い雄羊」「くろひつじ」などとあるが、詳細は不明。）晋の葛洪『肘後備急方』をはじめ唐の孫思邈『備急千金要方』、張鷟『朝野僉載』などに記事が見えるが、これについては注8を参照。

3　中野定夫ほか訳『プリニウスの博物誌』（雄山閣出版、一九八六年）、第Ⅰ巻四七二頁。以下、『博物誌』からの引用は同書による。

4　原文は次の通り。

南中八郡志曰、麋冷縣深山中有大虵、長數丈圍三尺。於樹上野鹿過便低頭繞之。鹿於是有頃而死、先含水濡之令濡、乃合頭角併呑之。訖便不能動、至數日、鹿乃消盡。虵自繞樹、鹿角骨悉鑽皮出、養瘡得一月乃愈。又永初山川記曰、髯虵呑鹿至角乃止。

なお『南中八郡志』は、北魏・賈思勰『斉民要術』（五三〇～五〇年頃成立）の巻一〇・橘に、『永初山川記』は北魏・酈道元（？～五二七）の『水経注』巻三二・夏水に、それぞれ引用があり、これ以前の成立であることが分かる。

5　『南裔異物志』は、『水経注』巻三六および三七に引用が見え、これ以前の成立であるが、撰者の楊子については不明。

6　蚺蛇については、宋代以降の諸書にも記事が散見される。なかでも明・謝肇淛『五雑組』巻九・物部一の記事が纏まっているので、先ずはこれから紹介しよう。曰く、「蚺蛇の大きいのは鹿を呑むことができるが、ただ花草と婦人を喜ぶ。山中に蚺蛇藤という蔓草があり、蛇を捕らえる者はこれを手にとり、花を簪にして紅衣を着、婦人のなりをして行く。蛇はそれを見ると凝立して動かなくなる。そのとき婦人の衣を蛇の首にかぶせ、藤で蛇を括る。蛇の胆は身を護ろうとして、撃たれた箇所に集まる。もし胆を取るだけであれば、竹でその箇所を撃ち、しばらくしてそこを利刀で剖くと、胆はすぐ落ちる。胆が取り出されても蛇は損傷を受けないので、これを放してやる。後にその蛇を捕らえようとする者が現れると、蛇は腹の傷痕を人に示して、胆が取られてしまったことを明らかにする。その胆を粟一粒ほど口に含んだだけで、百回の拷問を受けても死なない。ただし性は大寒で、よく陽道をしぼませ、子種をなくさせる。云々」と。

花が好きというのは、宋・范成大『桂海虞衡志』全一巻・志虫

魚に「蚺蛇」の条があり、この記事に基づいていよう。捕捉法については幾らか異なっていて次の通り。曰く、囮になった人が頭一杯に花を挿して蛇の方に向かう。すると蛇は近づいて首を地に打ちつける。そこで大声で「紅娘子！」と叫ぶと、蛇は頭をさらに低くして動かなくなる。その隙をうかがって、首を切り落とすのである、と。花好きというと聞こえがよいが、「紅娘子（良縁を結ばせる仲人の代名詞）」の声に反応するのは、やはり好色なのであろう。

ところで、これが清・俞蛟『夢厂雑著』巻四の「蚺蛇」になると、好色な性格が極端に強調される。それによれば、蚺蛇は女性と見れば追いかけて、絡みついて離れない。被害の女性の多くは死に、あるいは蛇を産む。そのため村の女性は、山に薪採りに行く際には、道の遠近によって身に着けるスカートの数をはかり、蛇に追いかけられると、それを脱いで蛇の頭にかぶせて逃げ走る。しばらくすると、蛇は気づいてまた追いかけてくる。そこで前と同じようにスカートを脱いでかぶせる。もしも道のりが遠くてスカートが無くなってしまうと、逃げ切れなくなってしまうのである、云々。全くスカートフェチの色情狂で、これでは村の女性達もたまらないが、説話の生成と発展という観点からは面白い資料である。ただ、ここまで貶められた蚺蛇のために一言弁明しておくと、この伝承は、むしろ人間自身の意識下の性的欲望とフェティシズムを反映したもので、明らかに冤罪である。

また蚺蛇の胆は薬効があることで知られ、これについても種々話が伝わっている。ただ、本筋からさらに脱線するので、取り上げることは控えたい。『五雑組』は二〇〇一年に上海書店出版社より刊行の歴代筆記叢刊本、『桂海虞衡志』は一九八六年に四川民族出版社より刊行の胡起望・覃光広校注本、『夢厂雑著』は一九八八年に上海古籍出版社より刊行の明清筆記叢書本、および同年に文化芸術出版社より刊行の歴代筆記小説叢書本（方南生等校注）を参照した。なお、明代の書では他に王臨亨『粤剣編』巻二、巻三、陸容『菽園雑記』巻五、巻十一、王士性『広志繹』巻四、巻五にも蚺蛇の記事があり、その好色さや胆・脂の薬効などについて述べている。

7　原文は次の通り。

蚺蛇、大者五六丈、圍五六尺。以次者亦不下三四丈、圍亦稱是。身斑、文如錦纈。里人云、春夏多於山林中等鹿。鹿過則銜之、自尾而呑。唯頭角礙於口外、卽深入林樹間、閣其首、伺鹿壞。頭角墜地、鹿身方嚥入腹。如此後、蛇極羸弱。及其鹿消、壯俊悅澤、勇健於未食鹿者。或云、一年則食一鹿。

8　中野訳第Ⅲ巻一一八七頁。文中のレンネット（Rennet）とは、母乳の消化のために数種の哺乳動物の胃で作られる酵素の混合物のことで、チーズの製造に用いられる。凝乳酵素とも呼ばれる。

なお注2に触れたように中国では、蛇除けに羖羊の角が効くとされている。晋の葛洪『肘後備急方』巻七、唐の孫思邈『備急千金要方』巻七六などに、「羖羊の角を焼いて煙を出しておくと、

蛇は逃げ去る」という。また唐の張鷟『朝野僉載』巻五にも、蛇除けのために羖羊の角と頭髪を焼くことが記されている。この煙が放つ臭気は相当なものだったようで、『太平広記』巻三二七・鬼一二所収の「蕭摩侯」では、幽鬼も鼻をつまんで退散している（出典は隋・蕭吉『五行記』、ただ一本では唐・竇維鋈『広古今五行記』とする）。また、この蛇の天敵羖羊は、仏典にも顔を覗かせている。『弥沙塞部和醯五分律』（『大蔵経』第二二巻・律部一）に載る舎利弗の過去世の話には、呪術師が蛇を捕らえるために羖羊を使うくだりがある（巻二六「第五分雑法」）。こちらは蛇穴の前に羖羊を置くのみで角を焼いてはいないが、ヨーロッパの鹿と角―インドの羖羊―中国の羖羊角と繋げてみたい気がする。今後の課題としておく。

9　月村辰雄・久保田勝一訳『マルコ・ポーロ　東方見聞録』（岩波書店、二〇一二年）による（一五四～五頁）。

なお、『東方見聞録』の続く記載にも興味深いところがあるので、ついでに引いておこう。

この蛇を捕らえようとする猟師たちは、同じところを引き返すということを知っているものだから、この道筋の上に罠を仕掛ける。まず、地中深くまで木の杭を打ち込み、その先端に剃刀のように鋭い刃物を取り付け、蛇に気づかれないように上から砂をかけておく。猟師たちはこうした刃物を道筋の上にいくつも仕掛けておく。そこに蛇が通りかかり、力いっぱい仕掛けにぶつかるので、刃物は蛇の腹に食い込み、その臍まで切り裂き、こうしてすぐさま死んでしまう。こうしてこの蛇を捕らえるのである。猟師たちは腹から胆嚢を取り出すと、それを高い値段で売りさばく。この胆嚢からたいへんに効き目のある薬が作られるのである。狂犬病の犬に噛まれた時には、この肝を一ドニエ（約一・二七グラム）の分量ほど与えて飲ませると、すぐ治ってしまう。婦人が難産の時には、やはり同じ分量を与えると、すぐ赤ん坊を出産する。疥癬や、あるいはもっとたちの悪い傷でも、ほんの少し上に塗れば、すぐさま治ってしまう。それでこの胆嚢は高く売れるのである。さらに蛇の肉も、味が良く好んで食べられるので、高く売れる。…

通り道に刃物を仕掛けて殺す仕掛けは、『中陵漫録』の第二話と似たところがあって面白い。そうして得た胆嚢が薬として高く売れること、肉が美味であることなどは、中国の蚺蛇の記事と重なる。マルコ・ポーロが言うこの蛇は、誇張と誤解はあるものの、明らかにニシキヘビを指している。

10　脚を持つ大蛇の爪の数は、古フランス語原本による月村・久保田訳では一つであるが、アルド・リッチ英訳本（イタリー語訳の集成本に基づく）による愛宕松男訳（平凡社東洋文庫、一九七〇年）では、「脚には脛の部分がなく、代りに三枚の爪がある。一つが大きくほかの二つは小さい。獅子やタカの爪に似ている」とある（「第四章　雲南への使節行」、第一冊三〇九頁）。旧中国の礼服に描かれる龍の爪は、皇帝が五、王子が四、高級官僚が三であった。英訳本の叙述は、三爪の龍のイメージに一層近づいてい

るように思われる。

11　原文は次の通り。

巴蛇食象、三歳而出其骨。君子服之、無心腹之疾。…

「服之」の「之」については、巴蛇と象骨のいずれを指すと考えるかで説が分かれる。ただ、蚺蛇の胆の薬効を考え合わせると、巴蛇を指すとするのが自然であろう。なお『太平広記』巻四五六・蛇一の「巴蛇」に同文を載せ、出典を『博物志』とするが、現行の『博物志』十巻にはこの記事は見られない。

12　『太平広記』の原文は次の通り。

有書生遊番禺、歴諸郡、経山中、見有氣高丈餘、如煙。郷人曰、此岡子蛇呑象也、遂告郷里。振鼓叫噪、而蛇退入一巌谷中。経宵、郷里人各持瓮甕往、見一象尚立、而肌骨皆化爲水。遂針破、取其水。里人云、此過海置舟中、辟去蛟龍。

13　原文は次の通り。

寶曆中、有蔣武者、循州河源人也。魁梧偉壯、膽氣豪勇。獨處山巌、唯求獵射而已。善於蹶張。毎賫弓挾矢、遇熊羆虎豹、靡不應弦而斃。剖視其鏃、皆一一貫心焉。忽有物叩門、甚急速。武隔扉而窺之、見一猩猩跨白象。武知猩猩能言、而詰曰、與象叩吾門何也。猩猩曰、象有難、知我能言、故負吾而相投耳。武曰、汝有何苦、請話其由。猩猩曰。此山南二百餘里、有嵌空之大巌穴。中有巴蛇、長數百尺、電光而閃其目、劍刃而利其牙。象之經過、咸被呑噬、遭者數百、無計避匿。今知山客善射、願持毒矢而射之。除得此患、衆各思報恩矣。其象乃跪地、灑涕如雨。猩猩曰、山客若許行、便請挾矢而登。武感其言、以毒淬矢而登。果見雙目、在其巌下、光射數百歩。猩猩曰、此是蛇目也。武怒、蹶張端矢、一發而中其目。象乃負而奔避、俄若穴中雷吼、蛇躍出蜿蜒、或掖或踴、數里之内、林木草芥如焚。至瞑蛇殞、乃窺穴側、象骨與牙、其積如山。於是有十象、以長鼻各捲其紅牙一枝、跪獻於武。武受之、猩猩亦辭而去。遂以前象負其牙而歸、武乃大有資産。

『太平広記』の「蔣武」は、以上で終わっている。しかし『類説』巻三二所収の「蔣武」では、この後に、虎が猩猩を背に乗せて依頼にあらわれる展開がさらに続く。『太平広記』は蛇部に収録するために、『伝奇』原本に続いてあった虎の話を削除したと考えられる。ただ、拙論においては不必要な箇所なので、ここには引用しない。

なおこの話は、森銑三の童話集『青い小鳥』に翻訳が載る（『森銑三著作集　続編　第十六巻』中央公論社、一九九五年、二九四～七頁）。

14　『ほんとうにあった話』は、ジャングルのことを書いた本というが未詳。『星の王子さま』が載せる挿絵では、大蛇が呑もうとしているのは熊のような獣であって象ではない。しかし、サン・テグジュペリの説明によれば、そこには「大蛇ボアは獲物（えもの）を噛（か）まずにまる呑みにします。そうして、そのあとは動けなくなってしまいます。獲物を消化するのに六ヶ月かかりますが、その六ヶ月のあいだ眠りどおしに眠るのです」と書かれていたという。前述の『山海経』に見える巴蛇の話とよく似ていて、影響関係を考え

たくなる。また後で紹介する十世紀中近東の文献にも象を餌食にする大蛇の話が見え、こうした点から想像すると、六歳のサン・テグジュペリの創作以前に、ヨーロッパには象を呑む蛇の話が伝わっていたのではないかと思われる。ボアは、ニシキヘビ類と近縁のボア科に属し、最大種は全長九メートルにも達するオオアナコンダ。その名は古代ローマの伝説上の大蛇に由来するという。後に引用するプリニウスの『博物誌』第八巻一四も参照。なお『星の王子さま』は、平凡社ライブラリー所収の稲垣直樹訳（二〇〇六年刊）を参照した。

15　中野訳第一巻三五〇～一頁。なお他にアイリアノス『動物奇譚集』に象を襲う大蛇の話が見え、こちらでは蛇が象を締め上げ、窒息させて斃している。中務哲郎訳（京都大学学術出版会、二〇一七年）第一冊・第六巻「二一　象対大蛇」を参照（二七一～二頁）。

16　家島彦一訳『インドの驚異譚　10世紀（海のアジア）の説話集』（東洋文庫・平凡社、二〇一一年）による（第一冊一七三～四頁）。なお、ルッバーンは第二冊巻末の「特殊用語集」の解説によれば、語源はペルシア語のラーフ（道、道路、道筋）とバーン（支配者、頭、君主）の合成語で、道の支配者、船の水先案内人、航海に長けた人、船長を意味する（第二冊三四八頁）。

同書には他に、馬や牛などの家畜を呑み込む空飛ぶ大蛇（第二七話）、舟の帆柱ほどもある大蛇（第二九話）、鰐を呑み込んだ大蛇（第一三二話）などの話が収められている。また、象を食べるのは大蛇だけではなかったようで、第一三九話には、象を食う巨鳥の話が載る。この鳥は、象を見つけると鉤爪で捕らえて空中に舞い上がり、地面に投げ落として殺し、それから象の上に舞い下りてこれを食う。『アラビアン・ナイト』第五四四夜「海のシンドバードの第二の航海の話」に登場する、巨鳥ルフ（この鳥は雛の餌に象を与える）の話とも似ており、家島彦一氏の解説によれば、『アラビアン・ナイト』の成立年代を考える上でも、重要な記録であるという（第二冊一八五頁）。なお象を掠って喰うこの鳥は、マルコ・ポーロ『東方見聞録』にも、怪鳥グリフォンとして記述がある（月村・久保田訳「一一　中インド――アフリカ東洋　マデガスカル島」二四四～五頁、愛宕訳「第六章　南海経由の帰国航路　208モグダシオ島」二三八～四〇頁）。

17　『日本随筆大成』（吉川弘文館、一九九五年新装版）による。第三期第三冊、二六五頁。

18　『太平御覧』の原文は次の通り。

梁書曰、倭國有獸、如牛名山鼠。又有大虵、吞此獸。虵皮堅不可斫、其上有孔、乍開乍閉、時或有光。射中之虵則死矣

ただ現行の正史『梁書』には、この記事は見えない。また清・陳元龍『格致鏡原』巻九九・昆虫類四・蛇は、出典を『南史』としてこの記事を載せるが、こちらも現行の『南史』には見当たらない。

19　原文は次の通り。

天寶中、有樵人入山醉臥、爲蛇所呑。其人微醒、怪身動搖、開視不得。方知爲物所呑、因以樵刀畫腹、得出之。眩然迷悶、

久之方悟。其人自爾半身皮脱。如白風狀。

20 陶勇標点『咫聞録』（筆記小説精品叢書・重慶出版社、二〇〇五年）により、簡体字を改めて示せば、原文は次の通り。

… 又藤縣剃頭者、過村、見酒肆、飲之大醉、倒睡樹下。適蚺蛇游至、見而呑諸腹。剃頭者覺周身包裹、漸漸緊切、目不能開、急取肚嚢中剃刀、向前開割、裂腹而出。蛇已死、而若人之頭面手足、皮已脱矣。採薬治之、雖癒、而皮皺盡如燙火傷痕、至今仍以剃頭爲業。

21 『簪雲楼雑説』は、清・呉震方『説鈴』後集に収められる。これによれば原文は次の通り。

吾湖沈公某、明萬歴（暦）間巡撫滇南。初至、文武来謁、有叅將安貌甚醜恠。厥首僅存白骨、絶無額準輔頤、唯目光爍爍騰注。公大驚、獨留問故、自云、玆地蚺蛇千歳以上者、高數丈、亘四五里、或七八里。恒宵遊遇豹虎諸獸、則吸而呑之、其于人亦然。某曾夜歸、覺爲風攝去。蹶趨而入、如坐丹爐中、萬火齊發、腥穢且逼人。某疑入蚺蛇腹矣、亟抽刀剖之約厚五六寸、任此蛇撼天搶地、奔躍數十里外。經時纔出、而此蛇已死、某通體殷紅、頰上皮肉俱盡。倦而寢、及寤始疼、閲半載方愈。此蛇約長五里。山中人競取脂燃燈。今其骨尚存、鱗大如笠。惜某具體而殘、爲平生之恨。公曰、昔狄武襄破崑崙關、尚衣銅面若狀貌魁奇、見者胆裂。樹功當不遠矣。後儂獠聞安將軍、卽驚怖逃匿、果屢著勲績、擢總副焉。

なおこの話は、清・姚之駰『元明事類鈔』巻三九（四庫全書所収）にも「五里蛇」のタイトルで、『簪雲楼襍記』からとして節録されている。

『簪雲楼雑説』は、四庫存目叢書にも、北京図書館分館所蔵の清鈔本が収められている（子部二五〇・小説家類）。字句に若干の異同があり、「五六寸」を誤って「五六十」に作る。

22 ほかに清・宣鼎『夜雨秋灯続録』巻八には、「大蛇」と題して殺生の報いで蛇に襲われる話が収められているが、罪を悔いて必死に祈ると蛇の姿が消えて助かる。結局、蛇には呑まれずにすんでいるので、本文中には取り上げなかった。

23 東大落語会編『増補落語事典』（青蛙房、一九六九年／二〇〇一年改訂四版）の「梗概」による（三三四頁）。武藤禎夫『定本落語三百題』（岩波書店、二〇〇七年）によれば、江戸期の噺本、漢文体笑話本などに見えるこの話は、猷山『諸仏感応見好書』（享保一一、一七二六年）にも収められ、もとは中国ダネらしい（三一八～二〇頁）。ただ、その出所が分からない。識者の御教示を乞う。

24 中野訳による。第Ⅰ冊三五一～二頁。

25 ラモナ・モリス、デズモンド・モリス『人間とヘビ　かくも深き不思議な関係』（小原秀雄監修・藤野邦夫訳、平凡社ライブラリー、二〇〇六年）、一五二頁。